

『捜査一筋』

九谷
六〇

人 物

渡辺公夫 (59) …… 刑事・警部補

(身長百六十センチ・小太り)

須藤健太 (25) …… 刑事・警部

(身長百八十センチ・細身)

真弓 (48) …… ラーメン屋「喜楽」・女将

安藤登 (55) …… 署長

吉田知恵 (22) …… 巡査

安住徹 (38) …… 安住ハウジング社長

安住恵子 (32) …… 安住の妻

伊藤一郎 (50) …… 鑑識官

原田勉 (55) …… 警視庁警視監

橋本義雄 (40) …… 金融業

○石神警察署・全景

茶色く色付いている木立。

警官や私服の男女が行き来している。

○同・署長室・中

背広姿の渡辺公夫⁽⁵⁹⁾、両膝に両肘を乗せ、両手を組んでソファーに座っている。

ゆったりとその前に座る制服姿の安藤登⁽⁵⁵⁾、

安藤「須藤健太、頼みますよ」

乗り気のなさそうな顔の渡辺。

安藤「二十五歳。東大法学部卒、国家公務

I種、それに……司法試験に合格」

渡辺「キャリアですね」

安藤「えー、バリバリのね」

顔をしかめる渡辺、

渡辺「署長、I種合格ってことは警部。課長になれるじゃないですか。現場を知りたいからって何も……」

安藤「良い心構えだと思いませんか」

渡辺「そりゃ、そうですね。どうせ頭で
っかちの甘ちゃんでしょう。逃げ出すに決
まってる。嫌いですよ、そういうの」

安藤「……」

渡辺「半年も経ちや警視庁にでも移るんでは
よう。課長ヅラしてふんぞり返ってりや良
いんですよ。刑事なんて……」

安藤「良いじゃないですか。組んでやって下
さいよ。来年は定年なんだし」

渡辺「定年とは関係ないでしょう。第一、何
で私なんですか」

安藤「ヘビナベと呼ばれるほどの捜査のベテ
ラン。勉強になる、それに本人が……」

ドアをノックする音。

安藤「来たようだ」

とドアの方を向き、大きな声で、

安藤「どうぞ！」

ドアが開き、革ジャンにGパン、サン
グラスを手にした須藤健太(25)が入って

来る。

須藤を見た渡辺、急に顔をしかめて上から下まで眺め廻す。

二人の傍に來た須藤、笑顔で、

須藤「須藤健太です。宜しくお願いします」
と頭を下げる。

渡辺、大きな声で、

渡辺「何だよ、お前！ その格好は！」
須藤の笑顔が消える。

渡辺「安っぽいテレビドラマの見過ぎじゃないのか！ 背広はどうした！ 背広は！」

口を開こうとした須藤を安藤が制して、

安藤「良いじゃないですか、私服は許されて
いるんだし……」

渡辺、立ち上がって、

渡辺「署長、お断りします」

と振り返り歩き出す。

安藤「渡辺警部補、命令と心得てください」
ギクツとして立ち止まる渡辺の後姿。

○同・廊下・中

機嫌の悪い顔で歩く渡辺。

その後ろに笑顔の須藤が歩く。

○同・部屋・前

捜査第一課の名板。

○同・中

デスクが並び、書類を書く刑事、パソコンを叩く刑事。

デスクの間を私服、制服の刑事たちが忙しそうに歩き廻る。

渡辺と須藤が入って来る。

二人を見て笑顔になる刑事たち。

刑事A「よう、新人。頑張れよ」

須藤、笑顔でペコッと頭を下げる。

刑事B「ナベさん、可愛がってやって下さいよ」

渡辺、顔をしかめたまま空いたデスクを指差す。

そのデスクに座る須藤。

渡辺、自分のデスクから分厚い調査報告書を取り須藤の所に行き、黙って渡す。

受け取った須藤、渡辺に何か話し掛けようと顔を向けるが、渡辺、振向いて自分のデスクに戻って座る。

× × ×

須藤、書類を読みながら時々顔を天井に向けたりする。

苦々しい顔で煙草を喫う渡辺、コートを持って立ち上がり入り口に歩く。

その姿を見た須藤、立ち上がって傍に近づく。

渡辺、不機嫌な顔で、

渡辺「何だよ？」

須藤「現場でしたら同行します」

返事をせずに歩き出す渡辺。

須藤が後姿に向かって大声で、

須藤「渡辺さん！ 何、イラ付いてるんです

か！」

座っていた刑事、動き回っていた刑事たちの動きが止まり、二人を見る。

渡辺が向き直ると、

須藤「そんなにこの格好が気に喰わないんですか。それとも……他に何かあるんですか！」

渡辺「何もない」

と後ろを向き、歩き出す。

須藤「親父から聞いていた渡辺さんと、随分違いますね」

エツと言う感じで立ち止まり、ゆつくりと振り返る渡辺、

渡辺「親父……」

と須藤に近付き、顔をじーつと見て、

渡辺「お前、あの須藤の……」

須藤「……」

渡辺「葬式の際は、まだ子供だったが……」

そうか……息子か……」

見詰め合う二人。

○同・玄関・前

ヨレヨレのコートを着た渡辺と須藤が出てくる。

渡辺の顔は強張ったまま。

須藤、サングラスを掛けながら思いっきり伸びをして、

須藤「さー、現場だ！」

無視して歩く渡辺。

須藤が急ぎ足で渡辺に近付き、後ろから笑顔で見下ろし、慣れ慣れしく、

須藤「子供の頃、親父から渡辺さんは現場百回を貫く刑事だと聞いていましたので……。済みません、図々しくお願いしちゃつて。俺、背広持っていないんです」

渡辺「……」

須藤「でも、嬉しいッス。憧れてたナベさんと一緒なんて」

渡辺「……」

須藤「署長が言っていましたよ。この事件、発生して既に三カ月が経過したが捜査が行

き詰まった。そこで、ナベさんに担当してもらおう事にしたって」

渡辺「……」

須藤「引き継いだ報告書を隈なく調べた渡辺刑事……。だが、手掛りが見つからない。そこで、渡辺刑事は新米刑事と共に新たな証拠を求めて現場に向かう。どうです、凶星でしょう」

渡辺が立ち止まり、須藤を見上げて、
渡辺「お喋りだな。お前の親父はな、実に寡黙な人だった。本当に須藤の息子か」

須藤、立ちすくむ。

渡辺「あのなー、人と話す時は、その気色悪い眼鏡を外せ！」

須藤「す、済みません」

とサングラスを外し、

須藤「他に何か？」

渡辺「気安く、ナベさんなどと……ま、これはイイ」

ニコツと笑う須藤。

渡辺「お前、背広持っていないって、面接もその格好だったのか」

須藤「ええ」

渡辺「ふーん、お役所も変わったもんだ」

須藤「急ぎましょう。明るい方が、新たな証拠を見付けられます」

呆れ顔の渡辺、

渡辺「何が新たな証拠だ。判ったような口をきくんじゃない！ 鑑識がな、徹底的に調べ終わってるよ」

須藤、戸惑った表情で、

須藤「でも現場を知っておかないと……」

渡辺「行くさ。犯行時の雰囲気を見にな」

空を見上げながら、

渡辺「……だが、まだ早い」

と歩き出す。

須藤「早いつて……。じゃー、何処に行くんですか？」

渡辺「ラーメンを喰いに行く」

エッと顔をしかめる須藤。

○ラーメン屋「喜楽」・全景

和風ラーメンと書かれた赤い暖簾。

○同・中

客は居ない。

渡辺と須藤が入って来る。

カウンター奥で仕込み中の真弓⁽⁴⁸⁾が振り返り、須藤の姿を見て軽く顔を強張らせる。

真弓「あら、ナベさん早いわね」

渡辺「大盛り、二つ！」

真弓「はい」

須藤に顔を向け、

真弓「で、こちらのイケメンさんは？」

須藤、満面笑みになり、

須藤「須藤健太です。宜しく。今日からナベさんの下で働くことになりました。実は、ナベさんと仕事をしたいって、俺が希望したんです。実は俺の親父ですが……」

渡辺、制して、

渡辺「お前は本当にお喋りだな。チャラチャラするんじゃない。女に嫌われるぞ」

と椅子に座る。

不貞腐れた顔で座る須藤、

須藤「あのー、俺は、タンメンの方が……」

渡辺「あのなー、ここは、ラーメン専門店だ。

喰いたくなければ、喰わなくても良いぞ」

ムセツとした須藤、小声で、

須藤「そんな言い方しなくたって……」

睨む渡辺。

須藤、気を取り直したように、

須藤「済みません。ナマ言っちゃって」

渡辺、無視して、

渡辺「報告書を読んだろう。要点を言ってみろ」

斜め上を見て、思い出すようにしてい

た須藤。スラスラと、

須藤「被害者、木下恵子、二十一歳。東都大
学四年。栃木県の資産家の長女。死因は絞
殺。犬と散歩をしていた大島良雄、七十二

歳が七月十九日早朝、遺体を発見し通報。恵子は、TシャツにGパン、スニーカー。衣服に乱れなし。物的証拠なし。ポケットの残留所持品、財布と携帯電話。財布には五万六千円。死亡推定時刻、七月十八日、二十一時から二十三時。扼痕と腹部に強烈な打撲の痕。その他外傷なし」

どうでしょうか、との表情の須藤。

渡辺「交友関係は？」

須藤「特定の男友達なし。携帯履歴の殆どが母親。母親によると、ここ一年ほど金遣いが荒くなり、金の無心ばかりだったとあります」

渡辺「扼痕所見は？」

頭に手を遣った須藤、

須藤「えーと……」

と顔をしかめる。

渡辺「お前、警察手帳はどうした」

胸ポケットから手帳を出し、

須藤「持ってますよ」

渡辺「メモってないのか」

須藤、平然と、

須藤「拙いっすか。俺、一度読めば、全部、頭に入っちゃいますので……」

エッという顔の渡辺、

渡辺「お前の記憶力が良いのは判ったがな、そう言うもんじゃないんだよ、捜査って奴は……」

須藤、眉を寄せ理解できないとの表情で渡辺を見る。

渡辺、ちよつとためらった後で、

渡辺「万一、片方に……」

と口を閉じる。

須藤「どうしたんですか？ ナベさんらしくないですよ」

渡辺「馬鹿野郎！ お前と俺は、今日初めて会ったんだぞ。何で、らしくない、なんて言えるんだよ」

軽く眉を顰めて渡辺を見る真弓。

須藤「済みません。しかし……話が途中で終

わっちゃったもんですから」

渡辺、静かな声で、

渡辺「お前の親父はな、あらゆる事を丁寧
にメモっていた」

エッと驚く須藤。

渡辺「お陰で、事件を解決できた」

須藤、ハツとした顔で、

須藤「あのー、親父の……最後の仕事のこと
ですか」

渡辺が頷くと、須藤が下を向く。

須藤、思い直したような表情で、

須藤「判りました。今度からメモるようにし
ます」

ウンと頷く渡辺、

渡辺「で、所見は？」

須藤「はい。頸部前面に二つの強圧皮下出血
痕。親指と見られるが……爪痕はなし。犯
人は腹部を強打した後、正面から絞殺した
と考えられる。頸椎に損傷あり。強烈な力
が加えられたと見られる」

渡辺「良いだろう。で、現場は？」

須藤「被害者のアパート付近の広場。広さは
ですね……えーと、約一ヘクタール」

渡辺「ヘクタール？ お前、何言ってるんだ。

広場は、百メートル四方だったはずだぞ」

須藤「ええ、ですから、一ヘクタール……」

考え込む渡辺。

真弓が二人の前に大きな井を置きなが
ら、

真弓「はい、お待ちどうさま」

笑顔で、

真弓「須藤さん、この人に英語なんか使った
って駄目ですよ」

須藤「女将さん、ヘクタールって、英語じゃ
ないですよ。フランス語ですよ」

真弓「まあ……。ナベヘビだったわね」

渡辺、ん？ という顔をして、

渡辺「真弓さん、それを言うなら薮蛇だろう」

フフツと子供っぽく笑う真弓。

須藤「アレツ、渡辺さんの渾名は、ヘビナベ

でしょう」

渡辺、真弓と須藤を交互に睨んで、

渡辺「いい加減にしろ！ 話しは後だ」

と蓮華で旨そうにスープを飲みだす。

箸で麺を二、三度持ち上げた須藤、不

満そうな顔で、

須藤「俺は、タンメンの方が……」

渡辺、須藤を睨んで、

渡辺「お前、グチョグチョ言ってるけどな、

ここのラーメン、喰った事あるのか」

須藤「ないっすよ」

渡辺「だったら、とやかく言っていないで喰っ

てみりゃー良いだろうに。死ぬ訳じゃない

んだから。旨くなかったら、そう言え。も

う連れて来ないから」

顔をしかめ、箸で麺を五、六本つかん

で口に入れた須藤。

アレツと言う表情をしてズルズルと大

きな音を立てて喰い出す。

凄まじい勢いで喰いだした須藤を、

渡辺と真弓が呆気に取られた表情で見る。

喰いながら上目使いで真弓を見る須藤、
須藤「旨い！ 女将さん、これ旨いっすね！」

自慢気な顔の渡辺、

渡辺「なー、旨いだろう。ここのラーメン
は天下一品だ。鰹節と鯖節の出汁が上品な
風味を生み出している。ところでな、頼む
から、ゆっくり味わって喰ってくれよ」

須藤を静かに見ていた真弓、

真弓「ナベさん、正夫ちゃんが生きていれば
須藤さんと同じ位ね」

ハッと顔を上げて真弓を睨む渡辺。

真弓と目を合わせた渡辺、寂しそうな
顔で下を向き喰い出す。

真弓、小声で、

真弓「ご免……」

脳天気な表情の須藤が、

須藤「ナベさん、正夫って……誰です」

渡辺、キッと須藤を睨み、

渡辺「余計な事を訊かずに喰え！」

須藤と真弓、顔を見合わせて首を竦める。

× × ×

空になった二つの井。

渡辺「さて行くか。今日は俺が払う。いいか、奢るのは今日だけだぞ！」

須藤「ご馳になります」

腕時計を見て、

須藤「ナベさん、今出ると……現場到着は、十九時頃。死亡推定時刻は二十一時以降……まだ二時間もありません。早いんじゃないですか」

渡辺、須藤を睨んで、

渡辺「季節を考えろ！ 事件は、いつ起こった！」

須藤「七月です。つまり、夏……」

渡辺「今は」

須藤「十月……」

ハッとして額に皺を寄せるが、すぐに

頷く。

○広場・中（夕）

下弦の月のみの薄暗い雰囲気。

広場には細かい砂利が敷かれ、周りには金網、その外側には生垣がある。

渡辺と須藤が広場の中央に立ち、周りを見廻している。

渡辺「どう思う」

須藤「球技用の広場ですね。照明はなし。周りにビルもなし。そうですね、七月十八日の二十一時以降。偶然……今夜と同じ……暗かったでしょうね」

渡辺「今夜と同じ？ 何が」

須藤「月ですよ。下弦の月」

渡辺「調べたのか」

須藤「ええ」

渡辺「そ、そうか」

須藤「しかも、入り口は一つ。一人で散歩する雰囲気じゃない。やはり……通り魔じゃ

ないですね」

渡辺「初動捜査で顔見知りの犯行と断定したが、これは間違っていないな」

黙り込む二人。

渡辺「被害者のアパートと犯行現場が十メートルと離れていない……。どう思う」

須藤「うーん、犯人が恵子を呼び出して……と上を向く。」

× × ×

フラッシュ

黒い後姿。肩口から恵子の姿。

黒い後姿が恵子の腹を殴る。

驚いて目を見開く恵子の顔。

仰向けになった恵子に馬乗りになり両

手で首を絞めている黒い背中。

× × ×

渡辺に顔を戻し、

須藤「そうですよ、犯人は恵子を呼び出して殺害した。そう考えるのが普通なんじゃないですか」

渡辺「ま、そうだな。だがな、もし、犯人に弱みがあれば、恵子に呼び出されたとも考えられる」

確信を持った表情で、

渡辺「さてと、関係者の洗い出しだ」

と歩き出す。

戸惑った表情の須藤、大きな声で、

須藤「ナベさん、ちよつと待ってくださいよ」

渡辺、立ち止まり振り返る。

須藤、近付きながら、

須藤「関係者ですが、既に大学やアルバイト先、それに、小中から高校の同級生など、徹底的に洗い出していますよ」

渡辺「……」

須藤「えーと、事情聴取したのは……四十九人」

渡辺「で」

須藤「彼ら全員にアリバイあり。結局、捜査は行き詰ってしまった」

渡辺「……」

須藤「また、連中を呼び出すんですか」

渡辺「須藤、全部男だろう。……女かも知れない」

須藤「エッ！ 女？」

渡辺「殺人とは人が人を殺すこと。悲しい事だが、男にも女にも、老人にも子供にも可能性がある。状況から男と決め付けて調べ出したが……先入観の怖さだ」

須藤「先入観……」

渡辺「人間は思い込むと、そのまま突っ走る。

一種の集団ヒステリー……。いいか、あらゆる可能性を考えるのが刑事の仕事だ。今度、女を徹底的に洗い出す」

須藤、そんな馬鹿な、との表情で、

須藤「しかし……一発で気絶させ、頸椎に損傷を与えるほどの力……。どう考えても女には無理なんじゃないですか」

須藤を睨みつける渡辺。大声で、

渡辺「馬鹿野郎！ お前、人の話を聞いてなかったのか！ 思い込みや決め付けはい

カンと言ったばかりだろうが」

直立不動になる須藤。

渡辺「女からも事情を聴取したはずだが、報告書に幾つあった」

須藤「母親を入れて四人……」

渡辺「内容は？」

須藤「男友達の聞き込み……だけ……」

と暫し考えた後、ハツとして、

須藤「りよ、了解しました」

静かに須藤を見る渡辺。

歩き出す二人。

○街・中（夜）

歩く渡辺と須藤。

須藤、オズオズと、

須藤「あのー、どうにも解せないんですが……」

：携帯の履歴は母親ばかりでした。それに

恵子の部屋に家電はなかった」

渡辺「イエデン？」

須藤「あ、家庭用の電話です」

渡辺「……」

須藤「恵子、または犯人……。どっちにしても、どうやって連絡したんですかね」

渡辺「それを考えるのが刑事の仕事だろう」

須藤、頭を搔いて、

須藤「は、はい」

渡辺「良いか、あらゆる可能性を考えるんだ。

お前、東大出で、頭、良いんだろう」

膨れっ面になった須藤、

須藤「そういう言い方は止めてくださいよ。

よく言うじゃないですか、色眼鏡で人を見るってなって」

渡辺「お前、その色眼鏡を掛けていたけどな」

頭を搔いて笑う須藤。

渡辺「まだ新人なんだ、どんな事でもいい、言ってみろ。怒ったりしない」

頷く須藤、腕を組んで、

須藤「携帯は使っていないとすれば……手紙ですかね……」

渡辺、怒って、

渡辺「なに馬鹿言ってるんだ！ 今時、手紙なんか使う訳ないだろう」

ビククリする須藤、

須藤「怒らないって言ったじゃないですか」

渡辺「内容に依るよ、内容に。まー良い、何故、手紙じゃないと言えるか、続けてみる」

須藤、気を取り直して、

須藤「少なくとも犯人であれば手紙など使わない。何故ならば、証拠として残る可能性がある。恵子であれば可能性はある。何故ならば、殺されたのは恵子だから証拠云々を考える必要はない」

渡辺、ポケットから煙草を出して火を点けて喫いだす。

須藤「しかし……そんな面倒な事……しないな。呼び出したければ、携帯を掛ければ済むが……履歴はなし。じゃー、恵子が犯人の家に行って……。これも、あり得ない。その場で用は済む」

と月を見上げながら独り言の様に、

須藤「要するに、連絡方法の目処が付けば、
そこから関係者の絞り込みが出来るはず
……」

渡辺、静かな声で、

渡辺「恵子か犯人のどちらかが、または、二人ともが、二人きりにならなければならぬ
い事情があつた。だから、どちらかが何らかの方法で連絡をした。そして、二人きり
になれたのは、あの広場……」

と立ち止まりポケット灰皿に煙草を入れる。
れる。

立ち止まった須藤、パツと明るい顔になり、

須藤「そうか、恵子と犯人は他人がいても直接連絡を取り合える関係だったんだ」

ニヤツと笑い、歩き出す渡辺。

須藤、そのままの姿勢で、

須藤「しかも、腕力のある女を徹底して洗
出す。そうですね、ナベさん」

と顔を戻すが誰もいない。

渡辺の後姿。

須藤、渡辺の後姿に向かって走り出す。

○ラーメン屋「喜楽」・前（夜）

暖簾が外されている。

○同・中（夜）

カウンターにビールの空瓶が二本。

真弓と赤い顔の須藤が座っている。

真弓「若い頃は、同僚や仲間の人たちと一緒に来てくれたんですよ。よく冗談言ったり、周りの人を笑わせたり……。明るかったの

よ、ナベさん……。」

須藤「今と随分違いますね」

真弓「あの人、変わっちゃったわ」

須藤「そうですか……。で、正夫君ですが」

真弓「ナベさんの息子さん。世の中って怖いわ。ナベさんは、キッチンと仕事をしただけなのに……。正夫ちゃん……。殺されたんですよ」

須藤「エッ！ 殺された！」

真弓「ええ、ナベさんが、懲役に追い込んだ
傷害犯が出所して……逆恨みですよ。十歳
の正夫ちゃんを……」

須藤「……」

真弓「それからよ、笑わなくなっちゃったの
は……」

須藤「そうだったんですか。真弓さん、ナベ
さんに初めて会った時ですが、俺を見て急
に怒り出したんですけど……何故だか判
ります」

フフと笑った真弓、

真弓「革ジャンよ。それに背格好が……」

エツと真弓に顔を向け、

須藤「まさか……そいつも革ジャンを……」

真弓「まさかじゃないわ」

須藤「じゃー、これ、着ない方が……」

真弓「逆よ、そのままだ良いのよ。いつまで
も拘って……。馬鹿みたい。それにねえ、
奥さんだけ……」

携帯電話が鳴る。

ポケットに手を入れる須藤、携帯を取り出して耳に当て、

須藤「はい、須藤です。アッ、ナベさん！ ……
…エッ、これからですか。もう、遅いし、
俺、アルコール入ってます……………い、
いえ、違いますよ。付き合ってる女なんて
いませんよ。判りました。行きますよ。す
ぐ、行きます」

携帯をポケットに入れて立ち上がり、
須藤「ナベさんが、明日の打ち合わせをする
から、すぐ署に來いって……………。参っちゃう
な……………。真弓さん、今日は、遅くまであり
がとうございました」

と入り口に歩き、戸を開ける。

須藤の後姿を見る真弓。

○東都大学キャンパス・中

枯葉が舞い、学生たちが行き来してい
る。

額に皺を寄せ、コート姿で歩く渡辺と

ニヤけた顔で女学生にキョロキョロと目を遣りながら歩く須藤。

男子学生たちが不審そうな顔で二人を見ながらすれ違う。

女学生たちは、イヤ〜ね、と言う顔付きで須藤を見ながらすれ違う。

○同・運動部部長屋・前

ジャージ姿の学生が行き来している。

須藤が警察手帳を手に、女学生と話している。

渡辺、五、六歩離れた所に立ち、須藤と女学生を見ている。

女学生が指を差す方を見る須藤。

その方向に顔を向ける渡辺。

○同・体育館・全景

○同・部屋・前

女子レスリング部の名板。

○同・中

マットの周りにユニフォームを着た四、五人の女学生と、ジャージを着た男性コーチがいる。

マット上では女学生、三組が練習をしている。

渡辺と須藤が入り口に立つ。

コーチに近づく二人。

須藤、胸ポケットから警察手帳を出してチラッと見せる。

ハッとして須藤を見るコーチ。

須藤が何かを話すとコーチが指を差す。

須藤、マットの横で笑顔で立っている

美香の所に行き、話し掛ける。

キツイ表情に変わった美香が須藤を突き飛ばす。

尻餅を付く須藤。

入り口に向って走り出す美香。

美香を追う渡辺。

須藤が起き上がり走り出す。

○同・キャンパス・中

ユニフォーム姿で走る美香。

学生たちが、何だろう、との表情で見る。

コートをなびかせてドタドタと追い掛ける渡辺。

走る須藤、渡辺を追い越す。

○同・図書館・前

芝生を走る美香のすぐ後ろに須藤。

須藤が美香に飛び付き、タックルを掛ける。

倒れこむ二人。

もつれ合う二人。

学生たちが周りに集ってくる。

美香「痴漢よ！ この人！」

顔を見合わせた学生たち、須藤を蹴ったり殴ったりする。

美香、須藤にヘッドロックを掛ける。
傷だらけの須藤の顔が紅潮してくる。

もの凄い形相の須藤、

須藤「ナベさーん！ 助けてくれーッ！」

渡辺、ゼイゼイ言いながら走って
くる。

警察手帳を見せる渡辺。

○ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

渡辺と絆創膏を顔に張った須藤が、喰
っている。

他に客はいない。

真弓が湯気の立つグラスを二つ、二人
の前に置く。

二人、真弓を見る。

真弓「おめでとう。初手柄ね、須藤さん。こ
の焼酎は奢り。でも、奢るのは今日だけよ」
顔を見合わせて笑う二人、

須藤「参りましたよ。まったく……。死ぬか
と思った」

渡辺「お前、足は速いが鍛錬が足らんな。そ
れに刑事が痴漢に間違われようじゃ世も

末だ」

須藤、無視して、

須藤「恵子が、美香に惚れてたなんて……」

渡辺「美香は、男友達から金をせびられていた。恵子は資産家の娘だ。可哀相に惚れている事を知った美香に利用されたんだな」

須藤「恵子が広場に美香を呼び出した。恵子は嫉妬心も手伝い、金を返せと執拗に迫った。逆上した美香が思わず腹を殴って絞殺。人間て怖いですね」

渡辺「……だがな、こんな旨いラーメンを作ってくれる優しい人もいる」

真弓、ニコツと笑う。

須藤、二人の顔を交互に見て、

須藤「へー、女将さんを口説いちゃって。俺、奥さんに言い付けますよ」

渡辺の笑顔が消え、

渡辺「馬鹿野郎！ お前、俺を相棒に選んだだろう。相棒の事ぐらい調べておくものだ」

キョトンとする須藤。

渡辺「女房はな、正夫が殺された時に、ロクデナシって叫んで出て行っただ。そうよ、俺は、ロクデナシよ！　だがな、今後一切、女房の話はするな。イイナッ！」

驚く須藤。

真弓が辛そうな顔で、

真弓「もう十五年も前の事なのに……」

と呟き後ろを向く。

○石神警察署・署長室・中

ソファ―に座る安藤と須藤。

須藤、立ち上がり、安藤に頭を下げ、

須藤「申し訳ありませんが、お断りします」

安藤「どうしても嫌か。うーん……。さて、

どうやって断るか……」

須藤「まだ、勉強中と……。少なくとも、あと一年は……。渡辺さんにも訊いていただけませんか」

安藤、仕方ないな、との顔付きで立ち

上がり、デスクの内線電話を押し、

安藤「渡辺警部補を呼んでくれないか」

とソファ―に戻る。

安藤「まあ、座れ」

須藤が座る。

二人の間に気まずそうな空気。

× × ×

ドアをノックする音。

安藤「どうぞ！」

ドアが開き、渡辺が、何だろう、との
顔付きで入って来る。

安藤「まあ、座ってください」

渡辺、須藤の横に座り横腹を肘で突き、
どうしたんだ、との表情で顔を見る。
硬い表情のままの須藤。

安藤「忙しいのに済みませんね。ご足労をお
掛けします」

渡辺、エツと言う顔をして、

渡辺「どうしたんですか署長。やたらと丁寧
ですね」

安藤「実は、ご意見をお聞かせ貰おうかと思
いまして……。渡辺さん、ザックバランに
言ってください。この須藤、どう思います」
渡辺「ハッ？ 何が、どう思うかですか」
安藤「原田警視監が須藤を寄越せと言ってる
んですよ」

渡辺「エッ！ 警視監……」

渡辺、須藤を睨み、

渡辺「お前、何遣ったんだ。この馬鹿が！」

キョトンとする須藤と安藤。

渡辺「イイか、己を綺麗にしていなければ、
警官は勤まらんのだぞ。何を仕出かしたん
だ！」

安藤に目を移し、

渡辺「署長、こいつ、何遣ったんですか？」

安藤「ナベさん、違いますよ。警視庁に配転
させろって言ってきたんですよ」

渡辺「配転ですか……」

須藤を見て、

渡辺「お前、警視庁に伝でもあるのか？」

須藤「そんなのありませんよ」

渡辺「じゃー、何故、若造のお前を欲しがるんだ。辻褄が合わんよ」

須藤、どうしよう、との顔で安藤を見る。

安藤「君から話さない」

須藤「ナベさんは、何故、私が刑事を希望したかご存知ですよね」

頷く渡辺。

須藤「人間は、お互いの幸せを守る為に約束事として法律を作った。しかし、それを守れない人間がいる」

渡辺、それで、という顔をする。

須藤「私はこれではいけないと法曹界を目指しました。検察、弁護、裁判官……いづれの道に進むにしても現場を知らなければ……」

渡辺「その話は聞いたよ」

須藤「済みません。俺、警察機構の構造改革ってテーマの卒論、書いたんですよ」

渡辺「卒業論文か」

須藤「ええ、警察官には、我々のような内閣府国家公安委員会に所属する一般司法警察職員と各省庁に所属する特別司法警察職員がいますよね」

頷く渡辺。

須藤「麻薬ひとつ捉えても我々以外に関係する省庁が複雑に絡み合います。密輸船で運ばれば海上保安庁の海上保安官、税関が絡めば財務省。不法入国であれば法務省入国管理官。麻薬捜査官は厚生労働省……」

渡辺「細かい事はいい」

須藤「親父が殉職したのは、麻薬捜査官との連絡不徹底が原因と聞いています。親父は死に、渡辺さんは大怪我をした」

渡辺、顔を歪め、

渡辺「で……、どうしろって書いたんだ」

須藤「簡単な事です。内閣府に統括委員会を作る」

渡辺「メンバーは？」

須藤「警察庁になりますね。そして委員会には各関連省庁に対する横串的権限を持たせる」

渡辺「命令権は？」

須藤「超党派で委員会が持つ。でも……こんなので誰も考え付く事ですよね」

渡辺「まーな。だが……、この卒論が、どう警視監と結びつくんだ」

安藤、顔をしかめて、

安藤「いやね、須藤の担当教授が原田と知り合いだそうで卒論を見せたんですよ」

渡辺「警視監の原田と言えば、署長と同期……」

安藤「そう、あいつはトントン拍子に登って行ったけど……。いや、そんな事はどうでも良い。辞令を書けば済むのに、ご意見伺いなどと面倒な事を……」

須藤、シミジミと、

須藤「私は現場について、まだ教わる事が沢山あります。ナベさんは、どうせ来年で定

年だし……。今のうちにと……。今後の事は、その時に考えれば良いと……」

渡辺「おい！ どうせ定年とは随分な言い方だな」

須藤「あ、済みません」

安藤、苦笑いしながら、

安藤「渡辺さんは頭でっかちは嫌いだって言っていましたよね。本人が嫌だと言っても警視庁に引き渡しちやいまいしょうか」

須藤、エツと言う顔で渡辺を見る。

須藤「……嫌ってたんですか……俺、知らなかった」

とガッカリした顔で立ち上がり、

須藤「署長、配転でも何でも構いません。お任せします」

と頭を下げ、サッサと出て行く。

渡辺、須藤に声を掛けようとする。

ドアがバタンと閉まる。

渡辺「署長……。頭でっかちの話は私が須藤に会う前のことでしょう」

安藤「いやー、冗談の積りだったが……」
と頭を搔く。

○同・刑事課・中

懽然とした顔で座る須藤。

渡辺が須藤の傍に来る。

チラッと渡辺を見た須藤、立ち上がって入り口の方に歩き出す。

渡辺、須藤の後姿に大声で、

渡辺「オイッ！ 話がある！」

須藤、立ち止まって振り向くが、すぐに背中を見せて出て行く。

周りの者が、どうしたんだ、との顔で

渡辺を見る。

制服姿の吉田千恵⁽²²⁾、渡辺の傍に来て、

千恵「やだー、仲が良いくせに……」

渡辺、睨み返して、

渡辺「煩せーッ！ 余計な事を言うな！」

千恵、首を竦める。

〇ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

暖簾がこちら側に掛っている。

カウンターに焼酎の瓶とコップが二つ。

赤い顔の渡辺と真弓が座っている。

真弓「署長も署長だけど……須藤さんも須藤さんね」

渡辺「須藤が……？」

真弓「優秀なんでしょう。まるで、父親に駄々を捏ねてる子供みたいじゃない」

渡辺「なに言ってるんだよ。あいつ、二十五だぜ」

真弓「歳なんて関係ないわ。男ってね、幾つになっても幼稚な所があるのよ。でも……そんな所が可愛いのかな」

渡辺、エヘッと言う顔になる。

真弓「やーね、還暦間近の男がニヤけちゃつて」

首を竦める渡辺。

真弓「ナベさんは、教えたいんでしょう、現

場の大変さを……」

とコップを口に持っていく。

渡辺、焼酎の瓶を持ち、自分のコップに注ぎながら、

渡辺「本人が望んでるんだ。それに、あいつが言うように、どの道に進もうが現場を知るってことは大切なことだよ。上の奴らは下を知らずして物事を決めるからな」

真弓「そうかも知れないわね。フフ、あのイケメンちゃん、結構、地に足が着いてるわね」

渡辺、呟くように、

渡辺「それに……確かに縦割り組織に横串を刺すってことは必要かも知れない」

真弓「何、それ？」

渡辺「いや。要するに、あいつは馬鹿じゃないってことだよ」

真弓が笑顔で、

真弓「須藤さんの事、気にする事ないわよ。

拗ねているだけなんだから」

そうかな？ との表情の渡辺。

○渋谷松涛マンション・全景（朝）

○同 玄関・前（朝）

大きなガラス扉。エントランスのガラス扉との間にATMのような機器が見える。

○同・エントランス・中（朝）

前にエレベーター。

○同・廊下・中（朝）

広く落ち着いた雰囲気。

○同・部屋・前（朝）

安住の表札。

○同・寝室・中（朝）

背広姿の安住徹（38）、ベッドサイドのテ

ーブルにある小瓶を持ち、中の錠剤を
ビニール袋に入れ、ポケットから出し
た錠剤を入れる。

ハンカチを出して小瓶を拭く。

○同・食堂・中（朝）

安住恵子⁽³²⁾、パンや紅茶カップがある
テーブルの上にハムエッグの皿を置
く。

安住が入って来て、

安住「時間がない」

恵子「ハムエッグだけでも食べなさいよ」

安住、面倒くさそうな顔で座り、食べ
出すと恵子が前に座り愚痴り出す。

恵子「ねえ、一生、樂させてやるって言っ
たのは誰よ。残高、減ってくばかりじゃない」

安住、睨みつけて、

安住「お前なー、俺はこれから大阪に出張な
んだぞ。下らんこと言い出すなよ！」

恵子「なによ！ 最近、仕事、仕事って」

安住「……」

恵子「ひよっとして……会社、危ないんじゃないの」

安住が立ち上がり、

安住「あの会社はな、俺にとって命の次に大切なものだ。俺が作った会社にケチをつける積りか。好い加減にしろよな」

恵子「もう随分ご無沙汰だし顔を合わせれば喧嘩。私……なんで貴方と一緒にいるのか判らなくなったわ。こんな人生、詰らない」

無視した安住、出て行こうとする。

恵子「ねえ、いつ戻るのよ」

安住、後ろを向いたままで、

安住「明日の夕方には戻る」

と出て行く。

恵子が咳をする。

○同・バスルーム・中

恵子が柄の付いた束子を持って入って来る。

シャワーを持って蛇口を下ろし、お湯を確かめている。
温度調整ノブを廻してバスタブを洗い出すが咳が酷くなり、蛇口を上げて出ていく。

目盛りは、二十度。

○同・寝室・中（夜）

ネグリジェ姿の恵子が水の入ったコップと小瓶を持って入って来る。

ベッドに座り、風邪薬の小瓶を見る。

蓋を開けて錠剤を出し、口に入れてコップの水を飲む。

風邪薬を透明な小瓶の横に置く。

× × ×

しきりに寝返りを打つ恵子。

起き上がり、透明な小瓶を持って蓋を開け、錠剤を出して口に入れ、コップの水を飲む。

布団の中に入る。

× × ×

恵子が寝入っている。

ゴム手袋をした安住が入って来る。

恵子のネグリジェとショーツを脱がせ、裸にしている。

恵子を抱き上げる。

○ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

満席。

真弓が大きな丼を二つ持ち、カウンタ

ーにいる渡辺と須藤の前に置く。

真弓、渡辺にウインクをする。

渡辺、ニヤツと笑う。

渡辺と須藤、喰い出す。

須藤「まー、俺も言われっ放しじゃー、面白くないっすからね。たまには臍でも曲げてみないと。で、あの後、署長……何か言っていました」

渡辺、素っ気なく、

渡辺「別に……」

須藤、拍子抜けしたような顔で、
須藤「そうですか……」

渡辺、旨そうに喰っている。

○渋谷松涛マンション・バスルーム・中（夜）

恵子を抱いた安住が入って来る。

バスタブの中に頭が入るように恵子
を寝かせ、蛇口を下げる。

蛇口から水が勢い良く流れ出す。

安住、蛇口を動かす。

○同・寝室・中（夜）

安住、透明な小瓶を持ち、中の錠剤を
出して左のポケットに入れる。

右ポケットからビニール袋を出して
中の錠剤を小瓶に入れ、風邪薬の瓶を
ポケットに入れる。

ゴム手袋を外して腕時計を見る。

針は、十時を差している。

○新宿駅・前（夜）

鞆を持った安住、時計を気にしながら歩いている。

○石神警察署・捜査課・中

渡辺、書類を書いている。

パソコンを叩いている須藤の肩を千恵が突つくと須藤が振り向く。

千恵、渡辺の方を見ながら大声で、

千恵「ナベさんと仲直りしたんだって。私、真弓さんから聞いちゃった！」

須藤、頭を搔く。

周囲から笑い声が響く。

渡辺、顔を上げ千恵の方を見て、

渡辺「駄弁ってないで仕事しろ！ 仕事を」
千恵、舌を出す。

○とある会議室・中

三人の会社員に安住が資料を持って話している。

○大阪駅・全景

○同・前

タクシーが停まり安住が降りる。
腕時計を見ると、一時四十五分。

○走る新幹線

○同・中

安住が座席で寝ている。

○渋谷松涛マンション・前（夕）

周りを気にしながら玄関に入る安住。

○ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

満席。

カウンター席に渡辺と須藤。

真弓が大きな丼を渡辺と須藤の前に置く。

二人が喰い出すと携帯電話が鳴る。

須藤、携帯を出して耳に当てる。

須藤「はい。エッ！」

と緊張した顔。

須藤「場所は……判りました。ナベさん」

携帯を閉じ、

須藤「出ましょう。(大声で)女将さーん、俺たちの分、ツケといって」

真弓が頷く。

渡辺、未練がましく喰い掛けの井を見ながら立ち上がる。

○渋谷松涛マンション・前(夜)

ランプを点滅させたパトカーや救急車、報道関係の車が並んでいる。

その周りに黄色いテープ。

警備する何人もの巡査。

ヨレヨレのコートを着た渡辺と革ジ

ヤン姿の須藤が来る。

二人が巡査に警察手帳を見せると巡査が敬礼する。

玄関に入っていく二人。

○同・安住の部屋・中（夜）

警察官が忙しそうに動き回っている。

ソファーに頭を抱えた安住。

手袋をした渡辺と須藤が入って来る。

伊藤一郎⁽⁵⁰⁾が二人に近付き、小声で、

伊藤「ご苦労様です。（安住を指で差して）あ
そこに座っているのが夫の安住徹です。可

哀相に混乱しています」

渡辺「現場は？」

伊藤「風呂場です」

と渡辺と須藤を促す。

○同・バスルーム・中（夜）

バスタブに目を開いたままの恵子が沈
んでいる。

渡辺、須藤、伊藤が入って来る。

須藤が恵子を見て顔をそむけ、口を手
で押さながら出ていく。

伊藤、小声で、

伊藤「自殺……いや事故っぽいですね。ご主

人によれば睡眠薬を常用してらしいです。
飲んで風呂に入り、そのまま……」

渡辺「そうですか。捜査課の出る幕はなさそうですね」

渡辺の目がバスルームを見渡し、温度調節ノブで止まる。

腰を屈めてノブを見る渡辺。

ノブの目盛りは、二十度。

手を顎に持っていていき唸る渡辺、

渡辺「死亡推定時刻は？」

伊藤「正確には検死解剖が必要ですが……ま
ず間違えなく七時以前ですね」

渡辺「……」

伊藤「私が遺体を調べたのが十九時。その時
には柔らかかったですから……」

渡辺「硬直は死後二時間後から半日の間でし
たね」

伊藤「ええ。ナベさん、何か不審な点でも……
……」

渡辺「うーん」

と顔をしかめる。

○目黒五本木ヒルズ・ビル（全景）

真新しい高層ビル。

○同・オフィス・前

安住ハウジング株の名板。

○同・部屋・前

社長室の名板。

○同・中

安住が大きなデスクに座り、大声で電話を掛けている。

安住「ノンビリお悔やみなんて言わなくて良いんだよ。急いで必要書類を持って来てくれ！ ……ナニーツ、死亡診断書ッ！ 判った。とにかく揃えるよ」

と受話器をガチャンと置く。

○石神警察署・捜査課・中

渡辺、煙草を喫いながら天井を見ている。

書類を手にした須藤が来る。

須藤「ナベさん、検死報告と鑑識報告が届きました」

と見せる。

渡辺「お前、目を通したか」

須藤「はい」

渡辺「部屋を変えるか」
と立ち上がる。

○同・会議室・中

向かい合って座る渡辺と須藤。

渡辺「お前……、死体を見るのは初めてだったのか？」

恥ずかしそうに、

須藤「いえ、親父を……。何だか被害者に見詰められたような感じで……。戻しそうでした」

渡辺「因果な商売よ。でも、これが現場だ。
慣れなくちやな」

須藤、頷く。

渡辺、煙草をくわえて火を点ける。

渡辺「で……」

須藤、手帳を見ながら、

須藤「肺に大量の水。成分は風呂の水と同じ。
死因は溺死。身体に外傷なし。死亡推定時
刻、十一月四日、二時から四時。血液中に
バルビタール、これは強い睡眠効果がある
薬だそうです。それから風邪薬のノスカピ
ン……」

渡辺に目を遣り、

須藤「バルビタールは処方箋がないと入手で
きないそうです。監察医に訊いたんですが
……医者は処方した際、風邪薬などと服用
してはいけなと必ず注意するそうです」

煙をフーツと吐きだす渡辺。

須藤「余程、眠れなかったんですね。やは
り……事故か自殺ですかねえ」

渡辺、二、三服した後、煙草を灰皿で
モミ消し、

渡辺「まず、自殺じゃないな。そうだろう、
死にたければ睡眠薬を多量に飲めば済む
からな。わざわざ風呂場に入って溺死する
事もないだろう」

須藤「そうですね、そんな面倒なこと……」

渡辺「風邪薬と言う事は、つまり恵子は風邪
を引いていた訳だ。お前だったら、いつ薬
を飲む」

須藤「普通……寝る前ですね」

渡辺「恵子は風邪薬と睡眠薬を飲んだ後で風
呂に入り溺死した事になる。変だと思わな
いか」

須藤「待ってください。ベッドに入り眠った
が寝汗を酷く掻いた。そこで、風呂に入っ
た……」

怒鳴りそうになった渡辺、煙草を持ち、
火を点けて大きく吸い込み、フーッと
煙を吐いて、

渡辺「須藤……風呂場の温度調節ノブだが……」

須藤「す、済みません。見ていません」

渡辺「そーか、すぐ出て行っただな。まー良い。いいか、これからはどんな悲惨な状況でも、現場の総てに目を配らなくちゃ駄目だぞ。冷静にな」

須藤「は、はい」

渡辺「目盛りは、二十度だった。この温度、どう思う」

須藤「二十度……。お湯というよりも、ぬるま湯……。いや、水風呂に近いですね」

渡辺「さつき寝汗を掻いて風呂にとか言ったよな」

頷く須藤。

渡辺「効き目が強いバルビタールと風邪薬を飲んだんだぞ。いくら寝汗を掻いたからって、途中で目が覚めると思っか」

須藤「……」

渡辺、煙草をもみ消して、

渡辺「まあ良い。仮に目が覚めたでしょう。

風邪を引いていながら水風呂に入る馬鹿
はいないんじゃないか。しかも、真夜中に
……」

須藤、硬い表情になり、

須藤「確かに変ですね」

渡辺「バルビタールと風邪薬の服用、それに
水風呂。つまり、寝汗を掻いて風呂に入っ
たとの仮説は崩れる」

須藤「……」

渡辺「状況証拠、物的証拠が揃っていれば、
こんな楽な事はない。だが、そんな事は滅
多にない。そこで俺たちは仮説を立てて実
証していく。その意味で言えば、寝汗の仮
説……それは、それで良い。だがな……」

須藤が制して、

須藤「現在ある証拠総てを頭に置き、ジック
リ考えた上で、仮説を立てろ……」

渡辺が頷き、

渡辺「ベッドの上にパンツがあったが……」

須藤「パンツ？ あー、ショーツですね。覚えています」

渡辺「お前が女に詳しいかどうかは判らないが……普通、女はな、風呂の後、下着を取り替える」

顔を緩めた須藤、

須藤「私も同じです」

渡辺「ほー、そうか。綺麗好きだな」

須藤「ええ、週に一回、必ず風呂に入ります」

渡辺「週に一回……お前、下着もか？」

須藤が平然と、

須藤「何か、問題ありますか？」

渡辺、顔をしかめて、

渡辺「その話しは、もう良い。ベッドにあつたパンツだが……鑑識結果はどうなっていた」

須藤、エツと言う顔をして報告書を捲りだす。

貧乏揺すりをする渡辺の足。

必死になって書類を捲る須藤、

須藤「ありました！」

と渡辺を見る。

渡辺「自分が興味ある部分は、じっくり読むが、他の部分はザッと目を通すだけ……。失格だな」

顔を強張らせる須藤。

渡辺「検察医も鑑識の連中もプロだ。俺たちもプロ。今後、奴らの報告書を拾い読みでもしてみろ、追い出すぞ！」

須藤、立ち上がった、

須藤「済みませんでした！」

と頭を下げる。

渡辺「俺は本気だぜ。まー、座れ。で……」

須藤、座って、

須藤「分泌液が検出されています」

渡辺、煙草を口にくわえ火を点け、

渡辺「つまり、総ての状況から、恵子は風呂に入る積りなどなかった」

須藤、目を見張り、

須藤「で、では、誰かが脱がせて……風呂に

入れた！」

顔を緊張させて、

須藤「ちよつと待ってください。あのマンションは、最新の指紋照合システムを備えていますよ。あの部屋に入れるのは……安住夫婦だけ……」

落ち着いた表情で須藤を見る渡辺。

渡辺「須藤、これは殺しだよ」

須藤「殺しッ！　しかし、安住は三日の夜から四日の昼過ぎまで大阪にいた。死亡推定時刻には部屋にいなかった……」

渡辺、確信に満ちた顔で、

渡辺「問題は動機だ。安住の会社の財務状態を調べてくれ」

須藤が頷く。

○同・捜査課・中

デスクで煙草を喫う渡辺。

須藤、横に来て、小声で、

須藤「寝室にあった薬瓶ですが、バルビター

ルじゃないかも知れません。鑑識に成分を調べさせます」

渡辺「……」

須藤「それに……最近、安住と恵子が医者に掛ったかどうか」

渡辺、煙草を灰皿に押し付けながら、

渡辺「念には念を入れる。捜査の基本だ。お前、悪くないぞ。だが、何故、調べようと思っただんだ」

須藤、意気揚々と大きな声で、

須藤「睡眠薬が匂います」

渡辺が立ち上がり、大声で、

渡辺「匂うだと！ この新米が！ ナマ言うんじゃねえよ！ 十年早い！ 十年な！」

周りの者が顔を上げて笑う。

エヘへと頭を掻く須藤。

ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

カウンターに須藤と千恵、五人ほどの客。千恵、しおらしく、

千恵「私ー、高校しか出てないんです」

上の空の須藤。

須藤「……」

千恵「お爺ちゃんが、警官やってて……」

須藤「……」

千恵「私、お爺ちゃんて素敵だなーって……」

だって、みんなに頼られていたし……。そ

れで、私も警官になって……」

須藤「……」

須藤を睨んだ千恵、急に立ち上がって

大声で、

千恵「真弓さん！ さっき頼んだ大盛りラー

メン、悪いけど、キャンセルッ！」

慌てた須藤、

須藤「吉田先輩！ どうしたんですか？」

千恵「馬鹿にしないでよ。キャリアかどうか

知らないけどね、どうせ、同じ人間じゃな

い。飯も喰えば、糞もする！」

驚いて千恵を見る客たち。

真弓は笑っている。

須藤「糞……」

と呆気にとられた顔をする。

千恵「それに、先輩なんて言わないでよね。

近所迷惑だわ。私の方が年下なんだから！」

須藤「す、済みません」

千恵「折角、ピチピチしたのが入ってきたから奢ってやろうと思ったのに」

と出て行こうとする。

須藤が立ち上がり、千恵の耳に口を近づけて、

須藤「ゴメンナサイ。今、もうちょつとの事件、抱えているんで……」

千恵「だから、何よ！」

須藤「余裕がないんです」

千恵「だから、何よ！」

須藤「……」

千恵「要するに、私の事なんか、どうでも良いつて事でしよう」

と入り口に行き戸を開けると、渡辺が

立っている。

渡辺、ギョツとして千恵を見る。

千恵、ギョツとして渡辺を見る。

× × ×

須藤と千恵、旨そうに喰っている。

渡辺の右足、貧乏揺すり。

渡辺「真弓さん、俺のは、まだですかー」

真弓「……」

渡辺、二人を見て、

渡辺「お前たち、喧嘩してたけど……」

無視して食べる二人。

渡辺「真弓さーん」

真弓、キツと渡辺を睨み、

真弓「順番でしょう。ナベさんは、次の次」

渡辺、ガクツと頭を下げる。

× × ×

渡辺が喰っている。

千恵、財布を手に小銭を出している。

爪楊枝でシーハー、シーハーしている

須藤。

千恵「じゃー、真弓さん」

と手にした代金を差し出す。

真弓が受け取り、

真弓「いつも、ありがとう」

とニコツと笑う。

須藤と千恵が店を出ようとすると、渡辺が大声で、

渡辺「ちよつと待てよ！ まー、良いから座れ」

と椅子を指差す。

須藤と千恵、顔を見合わせて、

須藤「何ですか？」

渡辺「何でコソコソ喰っていたんだ。しかも女の吉田が金を払った。お前たち出来てるのか」

再び顔を見合わせた二人、

須藤・千恵「お先に失礼します」

と店を出る。

渡辺、真弓を見る。

真弓、両手を広げて肩を竦める。

○安住ハウジング・社長室・中

ソファ―に座る渡辺、須藤、安住。

須藤が手帳を開いている。

安住「またですか。社長業ってねー、結構、忙しいんですよ」

渡辺「済みません。どうにも腑に落ちないことがありましてね……」

イライラする安住。

須藤「実は、寝室にあった睡眠薬はドリエルでしたが、奥さんの血液からは作用が強くて持続型の睡眠薬、バルビタールが検出されました。奥さんが飲んでいたのを知ってました？」

微かに驚く安住、

安住「いえ。病院にでも行ったんじゃないですか。バルビタールは、市販されていない」

渡辺、少しの間を置いて、

渡辺「睡眠薬に詳しいですね」

ハッとする安住。

須藤「奥さん、風邪、引いてましたか？」

安住「……」

須藤「血液から風邪薬も検出されましたが……
：瓶も箱も薬局の紙袋も見つかっていません」

安住、顔をしかめる。

須藤「何故でしょう？」

安住「あのねー、恵子が風邪を引いていたことも知らなければ、風邪薬も知りませんよ。そんなこと、一々、訊かれたって……。馬鹿馬鹿しい！」

携帯電話の音。

須藤、ポケットから携帯を出し、

須藤「ちよつと済みません」

と立ち上がり、部屋の隅に行き、携帯を耳に当てている。

須藤「私は判断できません。渡辺さんに代わります」

と渡辺の所に来て、

須藤「署長です」

と携帯を渡す。

渡辺、立ち上がり部屋の隅に行き、携帯を耳に当てる。

渡辺、小声で、

渡辺「はい、渡辺です………」

大声で、

渡辺「なに言ってるんですか。今、事情聴取の最中ですよ。………命令ですか。判りました。戻ります」

と携帯を閉じ、

渡辺「署に戻る」

と須藤に携帯を返す。

渡辺「安住さん、申し訳ない。ちよつと野暮用が出来ちやって……。また、お邪魔させていただきます」

と頭を下げる。

安住「あんた達はね、俺たちの税金で、飯、喰ってるんだぜ。好い加減にして欲しいね。あんた達が遣ってる事は、仕事の邪魔ばかりじゃないか。もう、来て欲しくないね」
と立ち上がり机の方に歩く。

○石神警察署・署長室・中

安達がデスクに座り、その前に渡辺と須藤が立っている。

渡辺、怒った顔で、

渡辺「署長、好い加減にしてくださいよ。こんな下らん用事で！」

安藤「そう怒鳴らないで下さいよ。私だって上から命令されれば聞かざるを得ないでしょう」

渡辺「……私も命令と言われたから戻ってきましたが、勝手すぎますよ、上は！」

須藤、困った顔で立っている。

内線電話が鳴る。

安藤「……判った。お通ししてくれ」

と立ち上がりソファーに行き座る。

安藤「さ、座って」

と合図するが、

渡辺「私は、同席する必要はないでしょう」とドアの方を向く。

安藤、立ち上がり、

安藤「渡辺さん！ 居てくださいよ」

須藤が渡辺に近寄り、

須藤「お願いです」

ドアが開き、小柄で細身な体にダブルのスーツを着込み、縁なし眼鏡を掛けた原田勉が(み)つて来る。

安藤が敬礼をする。原田、頷く。

遅れて須藤が敬礼。原田、頷く。

原田が渡辺を見る。

渡辺、渋々、敬礼する。

原田、ソファーに深々と座り、

原田「立っているのも何でしょう。皆さんも、お座りください」

安藤が座る。

渡辺と須藤、顔を見合わせた後ゆつくりと座る。

安藤、須藤に手を向けて、

安藤「須藤です」

会釈する須藤。

原田「あ、そう。なるほどね。身なりは気に

喰わないけど……、良い顔してるじゃない。
利口そうね」

渡辺「警視監、出来ましたら、ご用件を早め
に……」

安藤、ビクツとして渡辺を見る。

原田、右手で眼鏡を上げながら、

原田「なるほどね、ヘビナベ……。そんな顔
してるじゃない。噂はね、私の耳にも入っ
ていますよ。ヘビのような執拗な捜査。成
績は上げているけど昇進なんぞは糞喰ら
えの敏腕警部補。須藤君を現場に引き止め
ている張本人」

オズオズしていた須藤が、

須藤「現場にいたいと言ったのは私です」

安藤「警視監、須藤についてはお話したとお
り、後一年は……」

原田「実は……状況が変わりましてね。警察
庁から声が掛かっているんですよ、私に……
」

エツと驚く安藤。

原田「まー、ランクアップですから受けよう
とと思っているんですが……ついては、何か
土産を持っていきたい。しかも、長官を喜
ばせるようなものをね」

須藤と安藤は原田の方に顔を向けてい
るが、渡辺はソッポを向いている。

原田「長官は、長官で上を見ていますからね。
そこで須藤君の卒論ですよ。これを土産に
と思いましてね」

顔をしかめる須藤。

原田「ところが、あの内容は、まだ未熟だし
実現の可能性も低い。土産にするにしても、
もう少し煮詰めないかね」

と薄笑いを浮かべ、猫なで声で、

原田「須藤君、どう？ 私と一緒に遣ってみ
ない。君の将来、開けるよ」

渡辺、立ち上がって、

渡辺「私は捜査を続けますので」

とドアの方に歩き出す。

渡辺、ドアを開けて出て行く。

須藤、立ち上がり、

須藤「警視監、私は卒論の内容と同じように、

まだまだ未熟です」

原田「須藤君……」

安藤「須藤……何を言いたいんだ」

須藤、ニコツと笑って、

須藤「少なくとも、あと一年はヘビナベの下で勉強する積りです。渡辺さんからは捜査に関するあらゆる事を学べると思っていますので」

と振り返り、ドアに向かって歩く。

原田、呆気にとられた顔でズリ落ちた眼鏡をそのままに須藤の後姿を見る。

安藤、原田から顔をそむけてニヤツとする。

○ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

暖簾がこちら側にある。

渡辺、須藤、千恵がカウンターに座っている。三人とも顔が赤い。

カウンターには焼酎やビールの瓶が
十本近く並んでいる。

真弓が料理を作っている。

千恵、呂律の廻らない声で、

千恵「ナベさん、何で私を呼んだんですか：

…」

渡辺「お前、須藤と出来ちやうかも知れない
じゃないか。だからな、なるべく、その機
会を作ってやろうと思ってさ」

千恵「バッカみたい。余計なお世話ですよ。

男と女は出来る時には、出来ちやうの。ね

ー、須藤さん」

須藤「ナベさんも先輩も……。真弓さん、何
か言ってくださいよ。二人とも酔っていま
すよ」

真弓、カウンターの方に顔を向け、

真弓「悪いけど、今、激辛マーボ豆腐作って
るの。その二人、貴方に任せるわ」

片肘を付いた須藤、

須藤「アゝア」

渡辺、フツと真顔になり、

渡辺「須藤……。お前は、あれで良かったのか」

須藤、キツパリと、

須藤「ナベさん、俺、変に利用されたり、胡麻すったりするのって嫌なんです。人間、いずれは死んじゃうんだから、思いっきり自分に素直に生きた方が良いんじゃないかって……」

渡辺、大声で笑いながら、

渡辺「馬鹿野郎ッ！ こんな処で、まともな事を言うんじゃないよ！」

真弓の動きが止まる。

振り向いた真弓の怒った顔。

真弓「ナベさん！ こんな処って、どういう意味ッ！ 悪かったわね、こんな処で！ こんな処だけどね、私にとっては大切な処なのよ！」

渡辺「言葉の綾だよ、言葉の綾！」

真弓「私ねえ、そう言うのってイヤなの！ 言

葉の綾とか言うけどね、心の底には、こんな処って気持ちがあるのよ！ だから口に出ちゃうのよ！」

渡辺、立ち上がり、

渡辺「そんなに怒らなくたっていいじゃないか。俺、どつか間違ってるか？」

渡辺を睨む真弓、

真弓「須藤さんの言うとおりよ。人間は、いずれ死んじゃうんだから素直になるべきよ。何よ！ いっだって仮面ばかり被っちゃって！」

呆氣に取られて真弓を見る須藤と千恵。

真弓「たまには裸になって自分をさらけ出してみなさいよ。どうせ恐くて出来ないくせに」

皆、静かになる。

真弓を凝視する渡辺。

幾分落ち着いた真弓、

真弓「革ジャン見てもイラツク……辛いのは判るけど……いつまで経っても殻に閉じ

竈ったまま……」

頭を下げる渡辺。

真弓「私……以前のような陽気で馬鹿なことを言ってたナベさんの方が……好き」

と後ろを向き、料理を作り出す。

顔を見合わせる須藤と千恵。

渡辺が立ち上がり、入り口の戸を開けて出て行こうとする。

須藤が立ち上がる。

真弓「須藤さん、放つときなさいよ」

千恵、立ち上がり大声で、

千恵「ヘビナベの大馬鹿ッ！ このまま帰ってみろ！ 永遠に旨いラーメン、喰えなくなっちゃうぞッ！ それでもイイのかッ！」

ふと立ち止まった渡辺。振り返って、渡辺「そうだな。お前の言うとおりで。ラーメン、喰えなくなる」

と席に戻って座る。

須藤、拍子抜けしたような顔で座る。

暫しの沈黙。

渡辺「真弓さん……、椿、好きだったよね。
今度、俺んちに来ないか。ベランダの椿が
咲き出したんだ。綺麗だぞ」

黙って料理を作る真弓。

暫しの沈黙。

真弓、中華鍋を持ち上げて大皿にマ
ボ豆腐を入れ、カウンターの方に顔を
向ける。

真弓の頬に涙が流れている。

真弓「さー、出来たわ。辛いわよー。唐辛子
って凄い！ 作ってたら涙が出ちゃった」

と大皿を三人の前に置く。

真弓がカウンターの方に来て座る。

× × ×

四人が蓮華で喰っている。

千恵が涙を流しながら、

千恵「これ、涙が出るほど辛い。けど……
ウメーな」

渡辺、黙々と喰っている。

須藤「ねえ、真弓さん、これ、メニューに入ればイイのに。旨いっすよ！」

真弓「ありがとう。でもね、これは賄い料理。ねえ、ちよつと辛すぎない。私、まだ涙が止まらないわ」

渡辺、静かな声で、

渡辺「この辛さが、イイ……」

と鼻をグスンとやる。

○街・中

渡辺と須藤が歩いている。

渡辺「じゃー、別に赤字を出している状況ではないって事か」

須藤「はい。カスカスですが……署に呼んだ方が……」

渡辺「いや、動機が掴めていない。保険金狙いのはずなんだが……」

須藤「ええ、三億五千万ほど掛けてますね」
腑に落ちない顔の二人。

○ラーメン屋「喜楽」・前（夜）

真弓が暖簾を下げている。

渡辺と須藤が来る。

渡辺「あれ、今日は、もう終わり」

振り返る真弓。

真弓「フフ、良いわよ。どうぞ」

と入り口を開ける。

○同・中（夜）

カウンターに渡辺と須藤。

須藤「ビールいただけます」

真弓、ビールとコップをカウンターに置く。

須藤、二つのコップにビールを注ぐ。

後ろを向いたままの真弓、

真弓「夕方、千恵さんが来たけど……署長の

機嫌が悪いんだって」

渡辺「……」

真弓「何でも同期の人が検察庁に移ったんですって。警察って、人事異動があると貼り

だすんですね」

須藤「役所はどこも同じです」

真弓「何だか、ヤーね。じゃー、ナベさんも同じなんだ」

須藤「同じですけど、ナベさんは……」

渡辺、須藤を制して、

渡辺「余計な事を言うなよ」

真弓「あら聞きたいわ、私」

と二つの井をカウンターに置き、渡辺を見る。

渡辺、しょうがないな、との顔で、

渡辺「おれはね真弓さん。昇格もなければ転勤もなし。でも、来年は貼り出されるけどな」

真弓「凄い。何故、貼り出されるの」

渡辺「定年退職……」

真弓「あつ、そうか、そうだったわね。来年、六十よね。フフ、還暦……。お祝いに赤いチャンチャンコ、贈ろうかな」

ムセツとした渡辺、

渡辺「い、いらないよ、そんなの」

真弓と須藤が笑う。

○安住ハウジング・社長室・中

ソファ―に座る渡辺、須藤、安住。

安住「好い加減にしてくださいよ。事故だつて言うのに」

渡辺「済みませんね。お手間を取らせちゃつて」

安住「死亡診断書が下りないけど、あんたらの所為じゃないの」

渡辺「変ですね。検死は、終わってます。死因は溺死……。もうすぐ検察医がサインするでしょう」

安住「こっちだつて急いでるんだから……」

須藤「茶毘とか埋葬に関わりますからね。葬式……大変ですね。お気持ち、お察しします」

安住「……ところで、今日は何ですか？」

渡辺と須藤、身を乗り出して、

須藤「奥さんが風邪を引いていたのはご存じ
なかった……」

安住「この前、言っただろう。何で警察は、
同じ事をクドクド訊くんだよ。よっぽど閑
なんじゃないの。税金の無駄遣いだよ。ま
ったく！」

渡辺「ま、そう言わないで。ところで会社の
方は如何なんですか？」

安住「順調だよ。全く問題ない。訊きたい事
があるんなら急いでくれよ」

渡辺「何か、急な用事でも……」

安住「そんなものはないよ。しかしね、イイ
かい、こうやってる時間も俺たちにとって
は無駄なんだよ。俺たちはねえ、あんたた
ち公務員と違って、自分で稼がなきゃなら
ないんだよ。自分でね」

渡辺「不景気ですからねえ……。大変でしょ
うね。ご同情しますよ」

安住「余計なお世話だ。頼むから仕事をさせ
てくれよ」

渡辺「仕事熱心ですね」

安住「そうよ、俺が作った会社だからな」

渡辺「成る程、大切なんだ」

安住「当たり前だ！俺のな、命の次に大切なもんだ！」

須藤「奥さんが風邪を引いていた件ですが：

：

」
須藤を睨んだ安住、

安住「あんた、若いんだろう。そうやって同じことをネチネチ……。そんな事やってて楽しいの。もつとあるでしょう別の仕事が好きなの。刑事なんて辞めちゃいなよ。性格もひねくれちゃうんじゃないの」

ムセツとする須藤。

安住「それに、刑事のくせに革ジャンなんか着ちゃってさ。まるでアクション俳優気取りじゃない。そうなことやってたってね、恋人なんかできやしないよ」

真っ赤になった須藤、

須藤「あんた！」

安住「そうか、そうやってネチネチ口説くんだ。イヤだね男のくせに。親の顔を見てみたいよ！」

須藤「貴様ーッ！」

立ち上がり左手で安住の胸倉を掴み、
右手を振り上げて殴ろうとする。

サッと立ち上がった渡辺。須藤の右腕
に自分の右腕を絡ませる。

一瞬、三人の動きが止まる。

須藤の右腕から力が抜けていく。

安住「殴りやー良いじゃないか。エーッ！映
画みたいに。根性なしが！」

須藤、腕を離す。

渡辺「済みませんね。まだ若いもんで……」

三人が座る。

安住「で、風邪がどうしたのよ？」

冷静な顔に戻った須藤、

須藤「いえ、確認しただけです。ところで、

安住さんは大阪から家に帰り、奥さんが湯
船に沈んでいるのを発見し、警察に通報し

た。間違えありませんね」

安住「その通り。その質問は、これで五度目だ」

渡辺「発見して、すぐに通報した……」

安住「しつこいね。そうだよ！」

渡辺「湯船の中の奥さんに手を触れましたか？」

安住、少し考えた後で、

安住「水の中に沈んでいた」

渡辺「なるほど。で、すぐに電話を掛けた」

安住「そうだよ。テレビでやってるじゃないか、死体を見つけたら余計な事をせずに通報しろって。俺も、そうしただけだ」

渡辺「自分の妻なのに脈も調べなかった」

安住、戸惑いながら、

安住「い、いや、首筋を触って……調べたかな」

渡辺「そうですか。で、シャワーなんかを触ったりは……」

安住「さつきも言っただろう。何も触っていない

いつて」

渡辺「蛇口から、水は出ていなかった」

安住の顔が少し緊張する。

○回想・風呂場・中（夜）

バスタブから水が零れ、床に流れている。

蛇口から水がチョロチョロ出ている。

バスタブに恵子が沈んでいる。

安住が蛇口を下げる。

○元の場所

安住が顔を上げ、

安住「で、出てなかったよ。出てりや、止める」

渡辺「そうですか。判りました。ところで、

奥さんは水風呂が好きだったんですか」

安住「水風呂？　なに言ってるんだよ。いつも普通の風呂に入ってたよ」

渡辺「そうでしょうね……。風邪を引いてい

たし……」

不安そうな顔になる安住。

渡辺「実は、風呂場の温度調節の目盛りなんです……二十度でした」

安住、エッと渡辺を見る。

渡辺「風邪を引いていた奥さんが、水風呂に入りますかね」

安住「そんな馬鹿な！」

渡辺「そうですね。しかし……目盛りは、二十度だった」

安住、考え込んだ後、

安住「風呂から出た後、目盛りをいじったんじゃないの」

渡辺「変ですね。奥さんは、風呂の中で死んでいた。風呂に入っている最中に、わざわざ目盛りを変えたんですかね。しかし、何で……」

安住「そんな事、判りま……。アッ、うめたんじゃないかな。お湯が熱すぎたんだよ、きっと」

と、どうだ、と言う顔をする。

渡辺「なるほど。奥さんは、睡眠薬と風邪薬を飲んでベッドに入り、眠った。しかし風呂に入りたくなかった。安住さん、奥さんは、何で風呂に入りたくなかったんでしょうね？」

安住「知らないよ、そんな事。いや待て、そうだ、寝汗が酷くて風呂に入りたくなかったんだよ。きつと……」

須藤、バツの悪そうな顔をする。

渡辺「状況が見えてきましたね。奥さんは、寝汗が酷いんで裸になり、ネグリジェとパジャマを脱ぎ、ベッドに置いて、裸のままバスルームまで歩き、お湯を出して入った。だが熱い。そこで温度を二十度にかけて水を入れた。不幸な事に、ゆつたりとお湯に浸かっているうちに薬の影響で眠ってしまった。そして、そのまま溺死……。有りえない事はないですね」

ホッとした表情の安住。

渡辺、須藤に顎で合図する。

須藤「ところで、三日と四日ですが……」

安住「またか。何度も言っているように、大阪の取引先で打ち合わせですよ。あんた、先方に訊いたんでしょう」

須藤「ええ。会議は、四日の十三時に終わったそうですね。先日のお話では、貴方は、十四時の新幹線で東京に戻り、十八時半に帰宅。そして、奥さんを見つけて通報した」

安住「そうですね。あんたたち、クドイよ」

渡辺、無視して、

渡辺「三日の夜ですが……、貴方は、二十時半、つまり午後八時半に会社を出た。ところで……大阪にはどうやって……」

安住「えーと、新幹線だったかな」

手帳を捲る須藤、

須藤「大阪行きの最終二十一時十八分に間に合いますね」

渡辺「なるほど。では、三日の夜、つまり大阪に着いてから何処に泊まったんですか。

ホテルとか友人宅とか……」

安住「エッ！ 何処に？ そんな事……」

渡辺「覚えてない、ですか」

キツイ声で、

渡辺「一週間前の事だ。まさか、忘れる訳はないでしょう」

安住、興奮して、

安住「どういうことだよ。俺のアリバイかよ！
恵子は事故だったんだ。アリバイなんて失礼だろう！」

渡辺「落ち着いてください。事故だとしても、
一応、関係者を調べるのが警察でして……
辛い仕事です」

デスクの電話が鳴る。

電話の方を見る安住。

渡辺、どうぞ、と手を向けると立ち上がり、
デスクの受話器を取る。

安住「電話は取り次ぐなと……… 来てるのか。
来客中だ。帰ってもらえ。……… ナニッ………」

安住、顔が強張る。

渡辺、須藤に目配せし立ち上がる。

安住、二人を見て、

安住「判った。待っててもらえ」

と受話器を置く。

安住「もう良いだろう。どうせ事故だったんだ。もう堪忍してくれよ。こっちは、それどころじゃないんだから」

渡辺「そうもいかないですよ。済みませんが、また、来させてもらいます」

と顎で須藤に合図する。

顔を強張らせて二人を見送る安住。

○同・前

渡辺が立ち、須藤がドアを閉める。

須藤「済みませんでした」

と頭を下げる。

渡辺「誘いに乗るな。イイな。後で弁護士が
煩いからな」

頷く須藤。

○同・受付・前

受付のデスク前に橋本義雄⁽⁴⁰⁾と若い男Aがいる。二人とも黒のダブルを着てパンチパーマ、口髭を生やし、両手をズボンのポケットに入れて貧乏揺すりをしている。

廊下の向こうから渡辺と須藤が来るのが見える。

ギクツとする橋本。

渡辺と須藤、二人に近づく。

チラツと二人を見る渡辺。

橋本は姿勢を正すが、Aは同じ格好でいる。

橋本、Aを小突くと、Aが、何だよ、との顔をする。

橋本が耳元で、

橋本「デカだよ。ヘビナベ……」

姿勢を正すA。

渡辺と須藤が二人の前に来る。

橋本「お、お久しぶりです。その節は、お世

話になりました」

と深々とお辞儀をする。

つられて頭を下げるA。

渡辺「おー、橋本か。元気そうじゃないか」

橋本「お陰様で、何とか……」

渡辺「そうか。真面目にやってるんだろぅな」

橋本「え、えー」

渡辺、頷いて須藤に顎で行こうと合図する。

○同・廊下・中

渡辺と須藤が歩いている。

須藤が体を屈めるようにして渡辺に顔を近づけ、小声で、

須藤「知り合いですか」

渡辺「あー、以前、恐喝で傷害事件を起した。

今は、お縄ストレスレの金融業を遣っている」

須藤「金融業ですか」

渡辺「法人相手だが……。須藤、安住の会社

だが、金回りは悪くなかったはずだよな」

須藤「はい」

渡辺「橋本か……。須藤、落とせるぞ」

と、ニヤツとする。

○同ビル・玄関・前

渡辺と須藤が手持ち無沙汰な様子

で立っている。

背広を着た会社員たちが出入りしている。

橋本とAが出てくる。

渡辺と須藤が近付くとギクツとする。

橋本「渡辺さん、話なんかないですよ。頼みますよ。本当に何もしてませんよ」

渡辺「俺は何も言っていないぞ。やけに尻込みしてるな」

と橋本の胸をパンパンと叩く。

渡辺「オッ、結構ホコリが出るな。洗濯屋に出した方が良いんじゃないか。何なら俺が洗ってやろうか。どうする、安くしとくぞ」

須藤、二人の遣り取りを真剣な顔で見ている。

橋本「堪忍してくださいよ」

橋本、Aに、

橋本「おい、車、持ってきて来い。渡辺さんたちをお送りするから」

走り去るA。

橋本、観念したように、

橋本「じゃー、ナベさん、車の中で……」

須藤、渡辺に小声で、

須藤「車で送ってもらったりして……良いんですか」

渡辺「……お前、気になるのか」

須藤「えー、何となく借りが出来るようで」

渡辺「そうか。俺一人なら構わんが……。そうだな……」

と周りを見渡し、

渡辺「橋本、話ならあそこの公園で良いだろう」

とスタスタと歩き出す。

須藤「行きました。で、もう一人は？」

橋本「放つときゃいい」

渡辺を追う二人。

○公園・ベンチ・前

ベンチに座る渡辺と橋本。

傍に立つ須藤。

橋本「で、こちらのお若いのは？」

渡辺「須藤だ」

須藤、軽く頭を下げる。

渡辺「俺は警部補だが、こいつは警部だ。俺

より偉い」

橋本、声を上げて笑いながら、

橋本「そうですか。警察は面白い。実力と階

級が一致しない。それに、警部補の方が署

長より威張っている」

渡辺「余計なことを言うな。さてと……」

と煙草に火をつけ、

渡辺「ところで、話って何だ？」

橋本「エッ！ 俺が喋るんですか」

渡辺「……」

橋本「これだもんな。参るよナベさんには……

……。いいでしょう」

と話し出そうとすると、須藤が手帳を出す。

橋本「ねえ、須藤さん、書くのは止めてくれませんか」

須藤、渡辺を見る。

渡辺が頷くと手帳を仕舞う。

橋本「いえね、取り立てですよ」

渡辺「かなりの額か？」

橋本「金額は言えませんがね。まー、数億

……」

渡辺「で……」

橋本「かなり膨らんじゃっているんですよ。

このままじゃ無理でしょうね」

渡辺「どうする積りなんだ」

橋本「簡単ですよ。駄目なら、個人資産、会社の不動産、営業権……総てこちらが頂くだけですよ」

渡辺「丸裸か」

ニヤツと笑った橋本。意味深な顔で、

橋本「近々、まとまった金が入るとか言つて
ましたがね」

須藤「どんな金か……聞いていますか」

橋本、キツイ顔で須藤を睨み、

橋本「どんな金かなんてね、須藤警部さん。
こっちには関係ないですよ。きちんと利
子を揃えて返してもらえりや、どんな金で
も良いんですよ」

たじろぐ須藤。

橋本「こういう事は須藤さんの方が詳しいん
じゃないですか。何しろ警部さんなんだか
ら。ねえ、渡辺警部補さん」

渡辺、笑いながら、

渡辺「お前、安住のカミさんの件は……」

橋本「えー、聞きましたけど……俺たちには
関係ありませんよ」

渡辺「まさか……お前……」

真顔で、

橋本「馬鹿言わないで下さいよ。真面目に遣ってんだから」

渡辺が頷くと、Aが走ってくる。

A「兄貴ーッ！ 酷いじゃないですか！ 捜しちゃいましたよ」

橋本が立ち上がり、

橋本「専務と呼べと言ったろうが。この馬鹿野郎がッ！」

とAを殴る。

Aがスンマセンと頭を下げる。

渡辺、立ち上がり、

渡辺「ま、仲良く遣ってくれ。じゃ、またな」

渡辺と須藤、去っていく。

○商店街・中

渡辺と須藤が歩いている。

須藤「橋本って……遣り手なんですか？」

渡辺「遣り手だ。資金繰りに困った安住……とんだ処から金を借りたもんだ。ケツの毛まで筆られる」

須藤「捜査の事もあるし……。何故、安住は逃げないんですかね」

渡辺「理由は二つある」

須藤「二つ？ 教えてくださいよ」

渡辺「一つ目……橋本だよ」

須藤「橋本？ どう言うことですか」

渡辺「安住は橋本たちの恐さを知っている。

多分、借りるのは初めてじゃないはずだ。

今までは上手く利用していたが……」

須藤「今回は、厳しい……。それが逃げない理由ですか？」

渡辺「逃げられない事を知ってるんだよ」

須藤「警察より怖い……。まさか……命にも関わる……」

渡辺「ま、そう言うことだ」

立ち止まった須藤、歩いていく渡辺の後ろ姿。

走り出した須藤が追い付いて、

須藤「二つ目は、何ですか？」

渡辺「命の次に会社が大切だって言ってた

だろう。会社が総てなんだよ。ま、心の
抛り処ってやつだな。逃げられないよ」

須藤「会社が無くなれば、自分も無くなる……。
……。なんだか……そう言うのって、寂しい
ですね」

渡辺「……」

須藤「会社……一筋か……。捜査一筋……」

渡辺が立ち止まり、須藤の腕を掴んで
自分の方に体を向かせて、

渡辺「お前……それ、どう言う意味だよ。

俺への当て付けか！」

須藤、平然と、

須藤「言葉の綾ですよ。ラーメン一筋……」。

捜査一筋……」

須藤の腕から手を離れた渡辺、
渡辺「言葉の綾か……。嫌な言葉だ」

と歩き出す。

須藤、シミジミと、

須藤「赤いチャンチャンコか……」

明るい声で、

須藤「ねえ、ナベさん、定年後ですが……ど
つか旅行でもするんですか？　羨ましい
な」

サッと須藤の前に立ちはだかった渡辺。
須藤の胸倉を両手で掴む。

目を見張る須藤。

通行人が立ち止まって二人を見る。

渡辺「お前だけじゃない、みんなそうだ。

寄ってたかつて定年、定年って言うけど
な、俺が喜んでいるとでも思ってるのか。

馬鹿言っちゃいけない。そうよ、俺は捜
査一筋よ。他に何にもねえんだよ。あの
社長野郎と同じよ」

須藤、苦しそうな顔で、

須藤「常に冷静につて……。ナベさん！」

渡辺が須藤を殴り倒す。

倒れたまま顎に手を遣り、渡辺を見る
須藤。

渡辺、上から睨みながら、

渡辺「馬鹿野郎、何が冷静だ！　ふざけやが

って！ お前の言う通り寂しいんだよ。一筋って奴はな、切れちゃえば他に何もねえんだよ」

背中を丸める渡辺。

渡辺「何もない……」

須藤、起き上がり、

須藤「ラーメン、食いに行きましょうよ」

二人が歩き出す。

集った通行人がバラける。

○ラーメン屋「喜楽」・中（深夜）

カウンターに何本もの焼酎とビールの瓶が空になっている。

渡辺、酔い潰れて突っ伏している。

その横に優しい顔付きの真弓が渡辺を見ている。

二人の傍に立つ須藤、

須藤「じゃー、真弓さん、後は宜しく」

真弓、ニコッと頷く。

○安住ハウジング・社長室・中

ソファ―に渡辺、須藤、ゲッソリとした顔の安住。

安住「堪忍してくださいよ、もう……」

渡辺「済みませんね。この前、話が途中だったものですから。事故だったとしても……」

……

安住「一応、関係者を調べるのが警察……」

渡辺「ええ、ところで……」

安住「三日は何処に泊まったか聞きたいんだろう。要するにアリバイだよな」

渡辺「まー、そう考えていただいても結構です」

安住「実は勘違いしてた。あの夜は、JR高速バスだった。最終の十一時二十分発、大阪行き……。バスの中で寝た」

渡辺「新幹線じゃなかったんですか。てつきり新幹線だと思っていましたよ」

安住「一々、覚えちゃいないよ。出張が多いんだから」

渡辺「なるほど、二十三時二十分発ですか。」

しかし、随分遅い時間ですね。えーと、どなたか、それを証明できる方は……」

須藤が立ち上がり、

安住「好い加減にして欲しいな。切符があるよ、切符が……。あんたたちが帰った後、搜したんだよ」

と立ち上がり、デスクの方に歩く。

引き出しを開けて細長い切符を取り出して持ってくる。

ソファアに座わった途端、切符をバンとテーブルの上に叩き付ける。

安住「さー、これだよ！」

渡辺、切符を手に取り表と裏を見る。

イライラする安住。

渡辺「確かに七月三日大阪行き、二十三時二十分発の切符ですが……。安住さん、これ、誰かに貰ったなんてことはないですよね」

安住、凄い形相で、

安住「お前たちー、そこまで言うのかよ！」

渡辺「申し訳ありませんね、総てキッチンと確

認しないと……。辛い仕事です」

と須藤の顔を見て、話せ、と顎で合図する。

須藤「ところで、安住さんのマンションですが、素晴らしいセキュリティですね。調べたんですが……指紋照合システムなんです」

渡辺「あの部屋には、安住さんと奥さんしか入れない……」

安住が立ち上がり、

安住「ふざけるな！ 何だ、その言い草は！
まるで、俺が殺したような口振りじゃないか。いいか、恵子が溺死したのは深夜だ。俺はな、その頃、バスの中にいたんだぜ！
俺が、どうやって恵子を湯船に運んだって言うんだよ。運べる訳ないだろう。お前ら、シッカリしろよ！」

渡辺「安住さん、私は、貴方が奥さんを湯船に運んだなんて、一言も言っていないですよ」

と少し間をおいて、

渡辺「しかし……、安住さんもご存知のように長時間型で強い睡眠効果のあるバルビタール……」

黙り込む安住。

須藤が胸ポケットから紙を出し、

須藤「貴方は、一ヶ月前、一駅離れた柏木医院に不眠を訴え、バルビタールを処方してもらっていますね」

と処方箋をテーブルに置く。

処方箋を凝視する安住。

渡辺「それに奥さんは風邪薬も飲んだ。検査医はこの状態で歩くのは不可能だと言っています。つまり、奥さんは一人で風呂場に行ける状態ではなかった。誰かが奥さんを運んだ。運べるのは……貴方しかないない」

アッと口を開ける安住。

渡辺「安住さん、奥さんが深夜に死亡したと、何故、ご存知なんですか。それに膨らみ続

ける数億の借金……。奥さんの保険金、三億五千万。恐れ入りますが……。署までご同行いただけますか。詳しいお話を……」

ガクツと頭を垂れる安住。

○ラーメン屋「喜楽」・中（夜）

暖簾がこちら側に掛っている。

ラーメンを喰う渡辺と須藤。

真弓がカウンタの中で仕込みをしている。

須藤「事故に偽装した殺人。奥さんも可哀相

……嫌ですね」

渡辺「これが捜査課の仕事だよ」

須藤「ひよとすると、犯罪って永遠に無くないのでしょね。これが人間なのかな
……」

真弓、後ろを向いたままで、

真弓「須藤さん、罪を犯す人がいるのは事実
だけど……。人間総てが、そうだななんて思
うのは良くないわよ」

須藤「判ってますよ」

渡辺「検察、弁護、裁判……どの道に進むか……。まだ決めてないんだろう」

須藤「ええ、だからこそ、もっと修行ですよ。
ナベさん、お願いします」

渡辺、小さく頷き、

渡辺「須藤、まだ供述を取っている最中だが……安住がバスに乗っている間に恵子は死んだ。安住は、どうやって殺したと思う」
須藤「水の量ですよ。チョロチョロ流せば、溺死するまでに時間が掛かる。だから、長時間型のバルビタールを使った。アリバイ工作ですね。だが……安住は血液分析を舐めていた」

渡辺が頷き、真弓を見て、

渡辺「真弓さん、先に大盛りの七百円、此処に置きますよ」

とカウンターに小銭を置くと真弓が振り返り、

真弓「あら、二人とも千四百円ずつよ」

エッと真弓に顔を向ける渡辺と須藤。

真弓「ほら、この前……。須藤さんの携帯が鳴って二人とも急いで出てったことがあったでしょう。あの時のツケ、まだ貰ってなかったのよ。私、思い出しちゃった」

顔を見合わせて笑う二人。

須藤「シツカリしてるなー、真弓さんて」

真弓「当たり前前よ、女が一人で遣っていくんだから……」

恥ずかしそうに、

真弓「渡辺さん、今度、お邪魔しても良い？」

エッと驚く渡辺、戸惑いながら、

渡辺「い、良いに決まってるじゃないか」

と真弓を見詰める。

○石神警察署・全景

桜が咲いている。

制服姿の男性・女性警官、背広姿の男、ブラウス姿の女達が行き来している。

T・一年半後

○ラーメン屋「喜楽」前（夜）

真弓が暖簾に手を伸ばしている。

Gパンにジャケット姿の須藤とスーツ姿の千恵が来る。

須藤が肩を叩くと真弓が振り向き、ニコツと笑う。

須藤「俺が遣りますよ」

と暖簾を下げる。

真弓「食べるの？」

千恵「もう、お腹、ペコペコ。お願い」と手を合わせる。

○同・中（夜）

須藤と千恵がカウンターに座り、真弓がカウンターの奥に行く。

須藤「俺、いつもどおり、大盛り！ 真弓さんが作ったやつ」

千恵「私も真弓さんが作った大盛りッ！」

真弓が部屋の奥に向かって、

真弓「貴方！ お友達よ！」

部屋の奥から白い帽子を被り、前掛けを掛けた渡辺が満面に笑みを浮かべて出てくる。

渡辺「よッ、お二人さん。また大盛りかッ！」
須藤と千恵、渋々頷く。

渡辺「よしッ！俺が腕によりを掛けてヘビナベ特製ラーメンを作ってやる。これはな、今、試作中なんだが……、多分、旨いはずだ」

アアと諦め顔で苦笑いをする須藤と千恵。

渡辺と真弓が笑っている。

(了)